

短報

仙北の栗沢窯と大神成窯

藤原 茂

奥羽山脈の西麓、中仙町栗沢の八幡神社の北側から深沢を遡ること2kmほど入った山道のゆきどまりに、門脇基正氏の邸宅がある。裏の小堆がかつての窯跡でいまは雑木林におおわれているが、登窯の構築されていたころの面影を確かめることができる。

この窯の創始者は常吉とあって、当主基正氏の曾祖父にあたるが、もともと齊内村(現・太田町齊内)の農民であった萬太郎の五人姉弟の末子であった。長姉サキは白岩瀬戸座(角館町白岩)イ窯の三代目山手儀三郎に嫁いでおり、長兄丑松(次兄政吉は幼逝)やすぐ上の兄賢蔵(のちに儀三郎の分家である儀右衛門の養子となり山手儀助と称した。)それに常吉までがこのイ窯で働いていたのであった。

白岩瀬戸座は明治8(1871)年に、相馬大堀窯(現・福島県双葉郡浪江町所在)から来たといわれる松本運七によってその端緒が開かれ、文久元(1861)年までにイ・ロ・ハ・ニ・ホの五窯と吉重郎窯を加えた六箇所の窯から煙のあがるほどに賑わい、東北でも五指に数えられる窯業地として知られるまでになったが、時代も明治に入ると社会体制の変化や、経済情勢の急変を乗り越えずに廃窯が相つぎ、明治29(1896)年8月31日に起きた六郷地震によって決定的な打撃をこうむり、ついに明治33(1900)年ごろまでに消滅してしまった。

こうして白岩瀬戸座が衰退していく過程の中から、栗沢窯は明治11(1878)年6月に開窯された。常吉はこのころ長兄丑松が数年前に伝染病で死去していたので、その妻ふよと生活していたが、連れ子の長男友吉が陶技に長じていたので相協力して働いた。白岩瀬戸座にいた山手儀助、渡辺金六らの老練な陶工もこれに参加した。

この栗沢窯も六郷地震に遭遇し一時危機にさらされて、儀助は息子馬吉のいる一ノ関(岩手県)に去っていき、友吉は北海道へ新天地を求め渡っていった。だが常吉はこうした困難にもめげず、齊内で農業を営んでいた実子の栄昌も耕作をやめて来たので、ともども破壊された窯の復興につとめ、明治34(1901)年には窯四基を設け、さらに栄昌の子、熊長も明治42(1909)年に結婚し、陶工に成長していたので、まさに父子三代の家族ぐるみの経営となった。すでに明治38(1905)年には山形の陶工安

達新七を招いていたので、これを機縁として毎年山形から二・三人の出稼者が来て働いた。明治41(1908)年あたりから年6回も窯あげするようになったが、昭和の初頭からは半陶半農の経営形態となり、人手不足のため熊長の代の昭和15(1940)年に至り窯を閉じることになった。

栗沢窯で作出されたものは、白岩焼と混同されて世に出まわっているが、詳しく観察比較してみるといろいろな点で特徴があり区別がつく。陶土を念入りに水簸してあるせいか、胎土が滑らかで釉薬に光沢があり、とくに益子赤釉の照り映えは健康そのものの色合いをなしている。緑釉は少々きつい感じがなくてもないが燃えるような生命力を保っている。とりわけ海鼠(なまこ)釉の清新でおだやかな発色は、白岩や楢岡にはみられない雰囲気の漂いを示しているが、これこそ永代(太田町)から採取されたといわれる太田白の流しかけと思われる。二ツ井から運んで使った黒釉(山本黒ともいう)も見られ、呉須で絵書きしたものまでである。器形も甕・摺鉢・徳利・片口・花瓶・湯呑・湯通しなどと多岐にわたっている。

長角二種の窯印の捺されているものが残っているが、俳句を嗜んだ二代目栄昌がもっぱら刻印したと伝えている。「栗山」は俳号で「栗瀬焼」は栗沢の瀬戸焼の畧称と推考できる。

図1の蓋付甕は赤釉がけをした安定感のある堂々とした容姿をたたえており、蓋のつまみが全体を引締めている。図2の左右の鉢は、口縁から内側にかけて緑釉で、外側を赤釉でまとめているが、キリツとした作りが陶工の気真面目な性格を表現している。真ん中の湯呑も内側を緑釉にしてあるが外面を鉛釉で仕上げているので柔和な印象が伝わってくるようだ。ここでいう赤釉とはむしろ具体的には栗殻色といった方が至当かも知れない。

図3の左手の花瓶は、内側を海鼠釉、外側に薄い黒釉を施し段違いに鳥と茸を配したもので、鳥は緑釉を茸の傘の部分には濃い黒釉を用いている。右手の焙り徳利は、赤釉を基調としてはいるが、黒釉がまばら模様になっているので、ある種の窯変ともいえようか。首の口辺がわずかに括れているが、携行しやすいように紐がかけられ

る工夫がなされており、愛飲家への心づかいを知ることができる。

図4の注口付甕は、ひとところこの窯のものであろうかと迷わせられたのであったが、昭和52（1977）年秋に栗沢窯の旧跡を初めて訪ねたおりに、ふと見かけた陶片を掘り起こしたところ、疑問に思っていた注口付甕のふるささが栗沢窯であることを突きとめられた。すなわち全体の器形のなりたちと、釉薬の色彩が判断の材料となったのである。この時につくづく陶片に学ぶことの大切さを痛く知らされた。前にも一言してあるように、この海鼠釉からは、ほのぼのとした暖かい、まろやかな女性の麗姿を眺める想いのする世界に誘われる。佳品のひとつであるといってもよい。

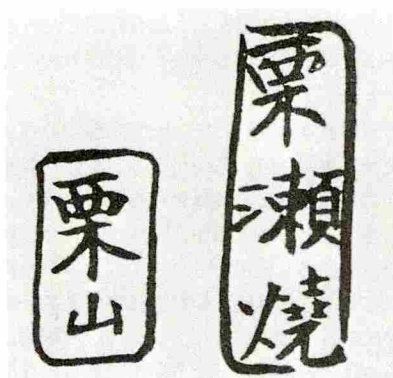
北海道へ渡った友吉は間もなく帰郷し、息子の市五郎とともに栗沢の東南の山ひとつ越えた大神成（中仙町）に登窯を築き、栗沢窯のものとはほぼ同巧の作陶をしたが、

長くは続かなかった。この大神成（おおかんなり）窯は主に素焼ものを中心として火鉢・火取・消壺などのほか、角しちりんも盛んに作った。それは明治32（1899）年から大正4（1915）年にかけてのことであった。

友吉は陶技のほか大工・彫刻・塗物までこなす、まことに器用な人であったという。いまこの窯跡はすっかり開田されていて、現地には標柱のみ立っていて、人家もなく畦道に散乱する陶片を見るだけである。

図5の乳棒には〈仙北郡豊岡村 大神成 銘産 明治三十二年 第七月 三日製〉と鮮明に文字が刻まれている珍品で、開窯した直後の制作と察せられ、創業時の意気を感じての得意さを伝えている。

この短報をまとめるにあって、門脇基正氏のほかに井上金市・太田桃介・小松幸一郎・藤田秀司の各氏から、それぞれ多くのご教示をいただいた。図に所載の資料はすべて当館所蔵のものであることを付記しておく。



栗沢焼・刻印



図1 栗沢焼・蓋付甕

仙北の栗沢窯と大神成窯



図2 栗澤焼・鉢、湯呑



図3 栗澤焼・花瓶、焙り徳利

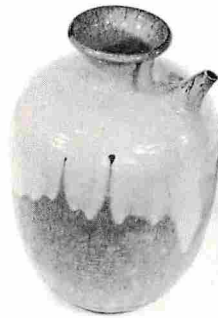


図4 栗澤焼・注口付甕、陶片



図5 大神成焼 乳棒